

## 仕立屋の夢—グリム童話「ガラスの柩<sup>ひつぎ</sup>」をめぐって

Über das Grimms Märchen “Der gläserne Sarg” (KHM163)

● 金 成 陽 一

### あらすじ

修業の旅に出たちびの仕立屋が、大きな森の中で迷子になってしまう。夜になって明かりを頼りに行きついた小さな家の戸を叩くと、出てきたのは小人の爺さんである。泊めてくれと頼む仕立屋の願いを初めは断っていたものの、最後には部屋の隅のベッドをあてがってくれた。

次の朝、外のけたたましい物音に仕立屋が目覚めると、逞しい真っ黒な牡牛と大きな角を生やした牡鹿が激しく戦っていた。凄まじい戦いは最後に牡鹿の角が牡牛の身体に突き刺さり、決着した。この後、牡鹿は見物していた仕立屋を角で持ち上げると、森の中を走りだしたのである。やがて大きな岩の前へ来た牡鹿は彼を地面に下ろして、岩についていた扉を角で突いた。すると扉があき、中から炎と湯気が出て牡鹿の姿が見えなくなってしまった。

岩の中からは「中へおはいり。どうもされやしないよ」との声。彼が入ってみると中は広い大広間になっていて、天井と床の四角い石の一つ一つにはよくわからない印が彫<sup>しるし</sup>ってある。その時また「真中の石を踏むと、大きな幸せが君を待っている」との声が響く。仕立屋が言われたとおりにしてみると、石は下へ降り出し、止まったところにはまた大広間があった。窪んだ壁に色つきのアルコール液や、いくつもの青い煙の詰まった透明なガラス容器、そして床の上には大きなガラス箱が二つあり、その一つにはお城のような立派な建物が入れられていた。小さいだけで、事務室や倉庫も実物そっくりに見事に作り上げられていた。

またもや、「もう一方のガラス箱を見る」という声がある。箱の中で、この上もなく美しい娘が黄金色の髪の毛にくるまって眠っていた。仕立屋がうっとり見つめていると、娘は突然目を開いて、「早く、早く、私を牢獄から助けて下さい。このガラスの柩のかんぬきを引き抜けば私は助かるのです」と言う。彼がすぐ言われたとおりにすると、外に出られた娘は彼に熱い口づけをして、「あなたは私が長いこと待っていた救い主、神の思召しによる私のご主人」と言ったのだ。

「私は、あるお金持ちの伯爵の娘なのです」と娘は話し出した。

「両親は早くに亡くなり、私は仲の良い兄に育てられました。ある晩、見知らぬ人に、夜遅く次の町へ行けないので一晩泊めてくれないかと頼まれたことがありました。私たちが承諾すると、その方の話はとても面白く、兄はどうかあと二、三日留まってくれるようにと願ったほどです。

夜、優しく愛らしい音の響き (die Töne einer zarten und lieblichen Musik) に私は目覚めたのですが、訳のわからない力のために言葉も出ませんでした。鍵のかかっている私の部屋へ先ほどの見知らぬ男が入って来たのがわかりました。彼は私に近寄ると、『魔力を使って (durch Zauberkräfte) 優しい音楽を奏で、君を起こした』と言うのです。そして『君に私の妻になってほしいばかりに、鍵のかかったドアを通してやって来たのだ』と続けました。でも私は彼の魔力とやらに対する反感がとても強く、一言も返事をしませんでした。彼は分かってもらえるものと期待していたのですが、私はずっと黙ったままです。腹を立てた彼は『お前の思い上がりを懲らしてやるぞ』と言って、部屋を出て行ってしまいました。

朝になって、この出来事を知らせようと兄を捜したら、早朝既に客人と一緒に狩りに出て

しまったとのこと。嫌な予感がした私は、すぐ森へと出かけたのです。しばらくすると、見事な一頭の牡鹿を紐で引いてくる客人に出会いました。私は彼に兄はどこか、そしてその鹿はどうしたのかと尋ねました。鹿の目からは涙が流れていたのですから。客人は答えずに笑い出したので、私はピストルを出して撃ったのですが弾は彼から跳ね返って私の馬に当たり、私は地面に放り出されてしまいました。そして彼が何か呪文をつぶやくと、私は意識を失ってしまいました。

気がついた時には、この地底でガラスの柩に入れられていたのです。客人はまた現れて、『お前の兄を牡鹿に変えてしまった、そしてお前の館は全て小さくして召使もろとも別のガラス箱に閉じ込めてしまった』と話しました。私が彼の妻になりさえすれば、全ては元通りになると言うのです。私が前と同じように一言も返事をしないでいると、彼は私を置き去りにして消えてしまいました。

その後、自分が何処かの若い男の人に救い出されるという幻が、私の慰めとなっておりました。今日、私が目を開けるとあなたがいて、私の夢は叶えられたのです。まずは私の館の入っているガラス箱を、あの石の上のせてほしいのです」

彼と彼女がその石に乗ると、石はすっと天井を通り抜けて上の広間へと昇っていった。外へ出た彼女が青空の下でガラスの蓋をあけ、館や他の建物はみるみる元の大きさに戻ったのである。更に、青い煙のピンをあけると、それらも召使いや家来に戻った。そこへ牡牛に化けていた男を殺した兄が、人間の姿になって森の中から現れて、彼女の喜びは一段と大きくなった。

その日のうちに、仕立屋は彼女と結婚したのである。

## 1. 夢の中

「ガラスの柩」<sup>ひつき</sup>(Der gläserne Sarg: KHM163)の幻想的な展開は、何度読んでも不思議な気分させられる。ガラスケースに収められたミニチュアのお城やガラスの柩に横たわる長い金髪の美女等々、まるで夢を見ているような印象を受けるのは私だけではないだろう。

この物語はフライベルク (Freiberg) のシュルヴァヌス (Sylvanus) が1728年に書いた「甘えん坊のお母さん子」(Das verwöhnte Mutter-Söhngen) がオリジナルテキストと考えられ、グリム童話に入れられたのはそれから百年以上後の1837年第3版からだ。

ヴィルヘルム・グリムは「内容は何も変えてはいないが、間延びした説明は削除した<sup>(1)</sup>」と述べている。しかしそれでも尚テキストはやや冗長で、口承文芸というよりはやはり紙に書かれた物語という印象が強い。

伝えようとしていることを簡単にまとめると、次のようになる。

- (1) 魔法使いのプロポーズを拒んだ美しい娘が、魔法でガラスの柩に閉じ込められてしまった。
- (2) やはり彼の魔法で牡鹿に変えられていた娘の兄が牡牛に変身した魔法使いと戦い、相手を殺す。
- (3) 魔法が解けた後、ガラスケースに閉じ込められていた宮殿や町を旅の仕立屋が解放する。
- (4) そして最後に仕立屋は美しい娘と結婚する。

余分な箇所を取り除いて、こんな風に話のエキスを残してみると、これは元々やはり昔からどこかで伝えられていた話だったのではないかという印象がますます強くなる。

「いさましいちびの仕立屋」(KHM20)や「大入道と仕立屋さん」(KHM183)同様、ここでも仕立屋が主人公として登場してくるものの、しかし二つの作品とはまるで違ってこちらの仕立屋

は別段勇敢でもないし、誰かを打ち負かした訳でもない。彼の積極性といえば修業の旅に出たことぐらいで、他の行動はことごとく受身なのだ。大きな真っ黒い牡牛を格闘の末殺したのは牡鹿に変えられた美女の兄だし、城や召使いたちを解放したのも仕立屋の力というより、魔法が解けた美女の言う通りに行動した結果であった。

彼自身は何等勇ましい働きなどしていないのに、物語が彼を中心に展開していくのは一体どうした訳だろう。一つ考えられるのは、これら全ては仕立屋が小人の爺さんの上等な寝床の中で見た一夜の夢にすぎなかったのではないかということだ。

格闘で勝った牡鹿に運ばれて壁のような岩の前にやって来た彼は、運を天に任せていたのだが、「手放して宙を飛んでいるとしか」思えなかったという。こんな感覚を我々は、目覚めているのか眠っているのか非常に曖昧なまどろみの中で時々体験することがある。私などウトウトしていると、突然ガクンと穴の中に落ち込んだような奇妙な錯覚に襲われることもある。

物語が、単なる傍観者にすぎない仕立屋に全て都合よく進んでいくのも、彼が潜在的に抱いていた願望の現れと考えるなら納得がいく。岩の中から響いた声は「こわがらずに、なかへおはいり！ 君はどうもされやしないよ」と呼びかけてくれるし、次には「この広間のまんなかの石を踏んでごらん。大きな幸福が君を待っている」と言ってくれる。そう、仕立屋の願望は全て充足されるのである。

夢と昔話は、元々その幻想性と辻褄の合わぬ奇想天外なところが良く似ている。フロイトが論証したように、突拍子もなく意味不明な夢であっても、それを詳しく分析して無意識の領域まで遡ってみれば、夢は一つ一つ重要な意味合いを帯びてくるのだ。「精神分析学入門」から「夢」に関する部分を引用しておこう。

女性の性器は、空な腔洞があってなかにもものを容れることができるという性質を備えたすべての対象によって、象徴的に表現されます。すなわち、〈凹み〉〈溝〉〈洞穴〉〈管〉〈瓶〉〈箱〉〈小箱〉〈トランク〉〈筒〉〈荷箱〉〈ポケット〉などによってです。〈船〉もこの系列にはいります。どちらかといえば、女性の性器よりも子宮と関係をもっている象徴もかなりあります。たとえば〈戸棚〉〈竈〉、とくに〈部屋〉です。部屋の象徴性は家の象徴性とつながっています。〈玄関〉や〈ドア〉は性器の入口の象徴となります<sup>(2)</sup>。

フロイトは更に「空想の産物」である覚醒夢についても、「それは空想していることを知っているだけではなく、思考しているのだ」と述べている。空想の内容ははっきりした動機によって支配され、覚醒夢の中の情景や出来事では利己的な欲求、野心、権力欲、あるいはその人のエロティックな願望が満たされるのである。だからこの物語は、若い仕立屋が明け方に見た願望充足の覚醒夢であったとは十分考えられることだろう。彼の夢は確かに大いに自己中心的で、利己的なものであった。

若い人々のあいだでは、野心がおおむねその先頭をきり、女性のように自己の野心を恋の成就にかけている人たちのあいだでは、エロティックな空想が先になります。しかし、男性のあいだでもエロティックな要求が背景にはっきりみえることもあります。英雄的な行為やさまざまな成功はすべて女性の賛嘆と好感とを求めるためなのです。覚醒夢は、非常に多様な変化の多い運命をたどります。短時間で消え去って新しいものがこれに代わることもあり、あるいはそれが固定されて、長い物語に発展してゆき、生活事情の変化に応じて変わってゆくこともあります。覚醒

夢はいわば、時とともに歩み、時によって新しい状況の影響を立証する「時のしるし」をもらうのです。覚醒夢は文学的な創造の原料となるものであり、覚醒夢から作家は変形、粉飾、短縮などによっていろいろな情景をつくりだし、これを自分の短編小説・脚本にもりこむのです。覚醒夢の主人公は、直接に自分の姿が現れるにせよ、別人の姿をかりるにせよ、いつも自分自身なのです<sup>(3)</sup>。

ここで、オーピー夫妻が書いた「夢」から、バスという名のキャリアウーマンが見た黒い雄牛の出る短い夢を引用してみよう。彼女はぬかるみの小道を、遠くにある光の柱に向かって歩いていた。

とぼとぼと歩く私の靴には泥がくっついて重くなりました。光の柱は次第に弱くなり、消えたかと思うと形が変わりました。それは大きな黒い雄牛になり、私に向かって走ってくるのです。雄牛はとても大きいのですが、恐くはありませんでした。そして、雄牛は私のところへくると鼻をこすりつけ始めました。私は手にくだもの入ったかごを持っていることに気づき、雄牛に食べさせました。最初、雄牛は勢いよくくだものを食べていましたが、突然酸っぱくなったと見え、私に向かってそのくだものを吐き出し、走り去って行きました<sup>(4)</sup>。

その後、彼女は雄牛の後を追うが、捕まえることができないどころか、突然出現した壁に激突してしまう。しかしそれはクッションに変わっていた。

「バスの夢」を分析してオーピー夫妻は、雄牛がバスの与えたくだものを食べるのは、彼女が当時付き合っていた恋人へプレゼントをしたことや、お金を与えたことを表していると述べる。

彼はときどき、お金が欲しくなったりすると彼女に優しくなりましたが、それ以外は機嫌が悪く、乱暴でした。この事実は光の柱が雄牛に変わる、という形で夢に表現されています。柱は男性器を象徴し、雄牛は恋人の男っぽい、威圧的な性格を表します<sup>(5)</sup>。

バスが雄牛を追いかけた時に出現した壁は、恋人との関係を終わらせるべきだと彼女の内面の常識的な声であり、壁がクッションに変わっていたことから、彼女は夢が自分の無事を表し、どんな打撃も受け止められると結論づけたのである。そして彼女は夢の分析を終えるとすぐ、恋人との実りのない関係を終わらせたのだった。

別な見方をするなら、雄牛は強さや忍耐強い努力を意味し、バスの生まれながらの力や犠牲を表してもいるのではないだろうか。つまり、自分がいつも恋人の犠牲となっていることに疑問を感じ始めていた彼女の心が雄牛に投影され、それをもう一人の自分が追いかけてやろうとしているのだ。飼ひ馴らされていない雄牛は危険だが、飼ひ馴らされるとそれは強力な味方となってくれる。

ところで、この象徴は道教や禅仏教の「十牛図」にも見られる。

初めは雄牛は全身が黒く描かれ、馴致の段階が進むにつれてだんだん白くなり、最後は自然的資質が超越されて雄牛の姿は完全に消える<sup>(6)</sup>。

バスが雄牛に追いつけなかったのは、逃げるのが早かったのではなく、それが徐々に消えていったせいではあるまいか。要するに、雄牛は彼女自身の中に溶け込んで一体化してしまったので

ある。

## 2. 牡牛について

男なら誰でも、この仕立屋のように一度は美しい女性に、「あなたこそ、わたくしが永いこと待ちこがれていた救いの主」などと言われてみたいといった勝手な妄想を抱いたりするものだ。そして、柩の中にいた美女のように全部女性の方がリードしてくれて、ただ言われた通りについていだけでいいのなら、男にとってこんな楽なことはあるまい。

仕立屋を連れてきた牡鹿が岩についていた扉を角で力まかせに突くと、中から火炎が吹き出し、後から恐ろしい湯気が出てきたのだという。元々、太陽神の子宮を表すといわれる岩を角で突いたら火炎が吹き出したとは、何ともエロティックなイメージではある。赤い炎は女性の出血を連想させるのだから。どうしたらいいのかさっぱりわからず立ち往生している仕立屋の姿は、セックスに焦がれる反面、いざとなると大きな不安に支配されてぐずぐずしているアンビヴァレントな若者の心を象徴させてもいる。

さて、仕立屋を眠りから覚ました黒い牡牛と牡鹿との戦いについて考えてみよう。

黒は元来冥界の闇を表す色であり、悪魔が昔から黒い衣服を纏っているのはよく知られている。

ユングの精神分析学における象徴大系では、牡牛の生贄は「ある精神生活の欲望を表す。この精神生活によって、人間はおのれの動物的な原初の情欲に打ち勝ち、通過儀礼にあずかった後で、平和を約束される<sup>(7)</sup>」のである。牡牛は制御されていない力であり、進化した人間はこの力を制御しようとする。つまりそれは「血気にはやるオス」あるいは、エネルギーの爆発を象徴させているのだ。

別なレベルで二頭の戦いは、月の女神エウロパの乗り物ともなっている牡牛が、太陽に属する牡鹿に駆逐されたことを表している。つまり（仕立屋がまどろんでいた）朝に、夜が追われたのである。

ギリシャの伝承で牡牛は海の神ポセイドンや、豊饒の男根神ディオニュソスに奉獻された動物で、ヘシオドスは「神統記」（832）の中で牡牛を「猪突猛進の激しさを持つ高慢な動物」と述べている。神々の神ゼウスもまた白い牡牛に変身して、裸で水浴びしていたエウロペを誘拐したのだった。

エウロペとゼウスの息子ミノスは兄弟たちとの抗争の後クレタ島の王となるのだが、それは彼がポセイドンに祈って海から素晴らしい牡牛を贈られたからであった。

ミノスの王位継承権は立証されたが、牡牛があまりにも立派だったのでミノスはそれを惜しんで犠牲にしなかった。ところがヘリオスの娘でミノスの妻だったパシパエが牡牛に恋をした。そこで亡命中のアテナイの職人ダイタロスは中が空洞の牡牛を作り、その中にパシパエが隠れた。すると牡牛がそれを真の牡牛だと思って交わった<sup>(8)</sup>。

これはミノスが牡牛を犠牲にしなかったため、怒ったポセイドンが復讐したのだといわれている。この結果生まれたのが、頭は牡牛、身体は人間という怪物ミノタウロスで、その意味は「ミノスの牡牛」。

ダイタロスによって造られたラビュリントス（迷宮）にミノタウロスが閉じ込められ、最後には英雄テセウスに殺されてしまう物語は、ギリシャ神話の一つのハイライトといえよう。テセウ

スがラビュリントスから再び出てこられるよう入れ智恵したのがダイダロスであったのを知ったミノス王は、ダイダロスを息子イカルスと共にラビュリントスの中に閉じ込めてしまう。ダイダロスは蠟と羽でできた翼を作ってそこを脱出するのだが、その際、嬉しくてあまりにも太陽に近づきすぎたイカルスは翼の蠟が溶けて海に墜落し、死んでしまったのだった。

先年旅したクレタ島では、クノッソス遺跡や博物館等、多くの場所で様々な牛のレリーフや像を見た。

牛がエウロペ伝説に登場したり豊饒を表す動物だとしても、これほどまで至る所に牛がいるのはどういう訳かと考えているうち、私ははたと「件」の話<sup>くだん</sup>を思い出した。「件」とは、十年か百年あるいは千年に一人かわからないけれど、偶然牛のような姿の人間が生まれることをいう。頭部が人間で下半身が牛に近かったり、逆に頭部が牛で他は人間等々、その姿は多様らしく、もしそれが事実だとするなら、ミノタウロスが実在したとは十分に考えられるだろう。映画「エレファントマン」(こちらは象のような顔をした人間だったが)のごとく、日本でも牛のような人間が生まれることがあったらしく、それが(特に関西方面で)「件」と呼ばれたらしい。昔、そんな異様な状態で生まれた赤ん坊<sup>にんべん</sup>を人に見せたり、話したなら、化け物と見なされて、一家が村八分にされたり、あるいは殺されかねなかっただろう。したがって「件」は、生まれたことすら無かったかのように、完全に闇から闇へと葬り去られたという話である。そう、「件」という文字は人を示す人偏<sup>にんべん</sup>に、牛が合わさってできている。

さて、太陽に属する牡鹿は、再生・創造・火・夜明けを表し、特にキリスト教では神を渴き求める魂・孤独・清純な生の象徴である。旧約聖書「詩篇」には次のように書かれている。

神よ、しかが谷川を慕いあえぐように  
わが魂もあなたを慕いあえぐ。  
わが魂はかわいているように神を慕い、  
いける神を慕う。(第42篇1-2)

ギリシャ神話では、偶然にも泉の湧く洞窟に行ったアクタイオンが、その中で女神アルテミスが眩しいばかりの裸身をさらして沐浴していたのを見たことにより、牡鹿に変えられ、犬に殺される。洞窟での出来事と牡鹿が登場してくる点で、この神話は「ガラスの柩」に似ている。

アルテミスはあるときキタイロンの山中で狩りをしていたが、そこに清らかな泉があったので、お供の処女たちとともに、裸になって水を浴びていた。そこへ同じく狩りに来たアクタイオンが通りかかって、木陰から彼女の美しい裸身をのぞいた。それに気づいた女神は、羞恥と怒りとで、アクタイオンを一頭の鹿に変えてしまい、彼がつれてきた五十頭の犬を主人に向かってけしかけた。無知な犬どもは、それが主人とは知らず、たちまち躍りかかって彼を八つ裂きにしてしまった<sup>(9)</sup>。

### 3. 不思議なしるし

仕立屋は岩の中からの「こわがらずに、なかへおはいり」との呼びかけにぐずぐずしていたものの、結局「不思議な力に駆り立てられて」鉄の扉をくぐって大広間へ入っていったのだった。

扉をくぐるのは、彼が新しい状態に足を踏み入れた隠喩であり、それが鉄でできているのは魔

除けを意味している。鉄は魔女に対する最後の武器で、昔は魔除けのためにわざわざ揺りかごの中に釘が打たれたり、鋏を隠しておくといった風習があった。つまり人々は、魔女が鉄の扉を通り抜けるのは非常に難しいと信じていたのである。

大広間についてテキストには、「天井と壁と床はびかびかに磨き出したまっ四角な石 (Quadratsteinen) でこしらえてあって、その石の一つ一つに、なんのこともわからないしるしが (unbekannte Zeichen) 彫りつけてあった」と書かれている。

「のみをあてると石が汚されるから、神殿は切石ではなく、原石で建造されなければならない」と記しているのは旧約聖書「出エジプト記」だ。実際、「切石は、人間の手の加わったもので、神の神聖な仕事が俗化されたものであり、創造のエネルギーにとって代わった人間の行為を象徴するものである。原石は、自由のシンボルだったが、切石は、隷属と暗黒のシンボルだった<sup>(10)</sup>」。更に、サン・ヴィクトールのフーゴーは奉納についての説教の中で、「石は安定性と忠誠の美德により『四角く堅固』な信仰を持つ信者のことを表している<sup>(11)</sup>」と述べている。彼の説教と童話の大広間にある「まっ四角な石」とは、根底において繋がってはいないだろうか。

次に、これらの石に彫りつけられた「なんのこともわからないしるし」もまた様々なことを連想させる。

「しるし」は書類などが本物であることの証しであると同時に、所有や身元、あるいは権力の証しでもある。「創世記」にはタマルという女にしるしを与えるユダの話がある。妻を亡くしたユダは、ある時、道のかたわらにいた一人の女を遊女だと思って、「さあ、あなたの所にはいらせておくれ」と声をかける。

彼はこの女がわが子の妻であることを知らなかったからである。彼女は言った、「わたしの所にはいるため、何をくださいますか」。ユダは言った、「群れのうちのやぎの子をあなたにあげよう」。彼女は言った、「それをくださるまで、しるしをわたしにくださいますか」。ユダは言った、「どんなしるしをあげようか」。彼女は言った、「あなたの印と紐と、あなたの手にあるつえとを」。彼はこれらを与えて彼女の所にはいった。彼女はユダによってみごもった。彼女は起きて去り、被衣を脱いで寡婦の衣服を着た。(「創世記」第38章16-19節)

交錯する二つの三角形が六芒星形を作るダビデの印は、ソロモンの封印と混同されることが多い。「ダビデの星」と呼ばれる印は、ユダヤ教のエンブレムだ。

聖書で、ソロモンの封印（五芒星）は天国への鍵や魔除け、厄除けで、靈感や完璧さを表す。またそれは智恵と教育から生じる常識、創造、空想、判断、記憶といった心の五つの機能を表したり、キリストの両手足と脇腹の傷、そして更には、聖母マリアの受胎告知、キリストの降誕、復活、昇天、マリアの被昇天の五つの喜びをも表している<sup>(12)</sup>。

同じく「創世記」では弟アベルを殺して、「私を見つける人はだれでも私を殺すでしょう」と恐れおののくカインに主（神）が、「いや、そうではない。だれでもカインを殺す者は七倍の復讐を受けるでしょう」と伝えている。

そして主はカインを見つける者が、だれも彼を打ち殺すことのないように、彼に一つのしるしをつけられた。カインは主の前を去って、エデンの東、ノドの地に住んだ。(第4章15-16節)

ここでカインにつけられたしるしは、神の保護の象徴であり、彼の身の安全を保証するもので

あった。また「ヨハネの黙示録」にも、同じく神のしるしが出てくる。

もうひとりの御使が、生ける神の印を持って、日の出る方から上ってくるのを見た。彼は地と海とをそこなう権威を授かっている四人の御使にむかって、大声で叫んで言った、「わたしたちの神の僕らの額に、わたしたちが印をおしてしまふまでは、地と海と木とをそこなうてはならない」(第7章2-3節)

以上見てきたように、キリスト教のしるしは様々に重要な意味を持っているのである。仕立屋の入った大広間の石には、それらのうちの何かが彫られていたのかもしれない。

広間の真ん中の石を踏めと言われた仕立屋がその通りにしてみると、「石は足の下でぐらつきだして、ゆっくりゆっくり、下へ下へと降りて」行った。その後、彼がまた屋敷の入ったガラス箱を「幅の広い石の上に」載せると、石は「すうっともちあがって、天井の穴をとおりぬけて、上の広間へせりあがった」。

この場面、現代人ならすぐに巨大なエレベーターを思い浮かべれば済んでしまうけれど、昔の人々にとってそんな装置は夢か魔法以外のなにものでもなかっただろう。考えてみれば、テレビやビデオだってまことに不思議な魔法の道具のはずなのに、現代に生きる我々には全ては当たり前前で、何の疑問も抱きはしない。こんな風に我々の日常から、意識することなく魔法やファンタジーは一つ一つ失われていくのである。

#### 4. 神の恩寵

伝承の中で「石」は特別に重要な地位を占め、魂と石の間には密接な関係が存在している。

人類の生みの親プロメテウスの伝説によれば、「石は人間の匂いをとどめ、石と人間とは上昇と下降の二重の働きをする」という。つまり、「人間は神から生まれ、神に戻っていき、原石は天から落下し、変質して天へ昇っていく<sup>(13)</sup>」のだ。このように上下する石は、現世と神の国を往復するものの象徴となっている。

ローマカトリック教会のミサは祭壇上の空洞に置かれた石の上で行われるのだが、礼拝は石それ自体に向けられるのではなく、その石を住家とする神に向けられている<sup>(14)</sup>。童話の仕立屋が屋敷の入ったガラスの箱や、煙のいっぱい入っているいくつものガラスびんを石の上に置くのも、同じように神の恩寵を求めての行動だったのかもしれない。

低い所から高い所へ昇る煙は、一般に大地と天の結びつきや人間の霊化の象徴であって、ふたをあけたびんから出た煙が「生きた人間に化けた」理由もこんなところに潜んでいる。

仕立屋に救い出された娘の台詞をいくつか聞いてみよう。

「神さまのおさばきの正しいこと！」

「おなさけぶかい神さまは、あなたをわたくしのところへおみちびきくだされ、わたくしの苦患を絶ってくださいました。 — あなたこそ神さまのおぼしめしによるわたくしの殿御、～」等々。

こんな風に彼女の言葉はことごとく神につながっているのだが、人前でこうして神を讃えるやり方は、キリスト教というよりはどこかアッラーを信奉するアラビアの匂いが漂っている。

物語は、ガラスの箱の中にいた娘が目覚まして仕立屋と結婚するところで終わってはいはず



なのに、更に続いていき、後半からはミステリーの謎解きのような印象を受ける。娘は、立派な家がどうしてガラス箱に容れられたのか、どうして兄が牡鹿に変えられたのか等々、一つ一つ謎のヴェールをはがしていく。しかし、メルヘンは本来ファンタジーについての説明など一切必要とはしないものだから、紙に書かれた文芸という印象を受けるのは、恐らくこのあたりにその原因が潜んでいるのではないだろうか。

## 5. ガラスについて

この物語はガラスの柩以外にも、広間の中にアルコール性の液体やガラスの器があったり、森の中で魔法使いに会った娘がピストルを撃ったりと、様々に近代科学の影響が感じられる。

ここでガラスの変遷について簡単にまとめてみよう。

人類がガラスを使い出した歴史は古く、既に紀元前2300年頃メソポタミアのエリドゥからはガラスの塊が出土しているのだが、しかし別な説では紀元前2600年頃のエジプトでガラス玉が作られたのが最初ともいわれ、今のところどちらが古いのかははっきりしていない。透明ガラスの美しさが発見されたのもメソポタミアのアッシリア時代で、そこでは無色に近いカットガラス製品も流行した。その後出現するローマ帝国では、ガラス工房で今日でも見られる「吹きガラス」の技法が発明され、ガラス器は大量生産されるようになったのである。

更にローマン・ガラスの技法はイスラムに伝わった後、「イスラムの華」と称賛されるほど高度な発展を遂げ、これが後に東方貿易を独占していたヴェネチアに伝わって、ムラノ島のガラス工房はヨーロッパの中心となった。17世紀に神聖ローマ帝国の首都がプラハにおかれると、芸術偏愛者のルドルフ二世によって、ヴェネチア・ガラスの技法を取り入れたボヘミアン・ガラスが育成されるようになる。無色透明のボヘミアン・クリスタルは当時、ハプスブルクの王室をはじめとする各国の宮廷で広く愛用されたという。

こうした変遷を経て、ドイツにガラス工芸が興隆してくるのはやっと18世紀のことで、グリム童話「ガラスの柩」に影響を与えた前述のシュルヴァヌスが「甘えん坊のお母さん子」を書いた1728年頃の時代背景とぴたりと一致する。

一方、ピストルはどうかといえば、16世紀の火縄式が一番古く、次第に改良されて実用化されるのは17世紀のこと。

その語源は、「最初にピストルがつくられたのがイタリアのピストイア (Pistoia) 市」とか、「初期のピストルの口径が古い貨幣のピストール (ピアストル) の大きさにあわせていた」、あるいは「鞍の前部に置いていたのでピスタロ (鞍の前部の名称)」<sup>(15)</sup>等の諸説がある。イタリアのプレシア地方では、17世紀から18世紀にかけて年間四万挺以上ものピストルを生産していたという。

グリム兄弟が註で「ガラスの柩」と「白雪姫」との関連について指摘しているのは、どちらも柩が透明なガラスでできている点だ。

透明なガラスは、いつでも見られていたいという娘の自己顕示欲を表す一方、外からくる刺激に対して彼女が自分の周りに張りめぐらした防護柵でもある。つまり「透明なガラスは内側にいる者と外側の者とを断絶させ、互いに見ることはできるのに決して触れられず、感情のある部分を冷たく遮断<sup>(16)</sup>」しているのである。

## 6. 「千夜一夜物語」との関連

「千夜一夜物語」第39夜から始まる「恋に狂った奴ガーニム・ビン・アイユブの物語」では、

王の寵愛を受ける美しい腰元クト・アル・クルプに嫉妬した王妃が、王の留守中に彼女を亡き者にしようと強力な麻酔薬で眠らせ、箱に入れて墓に埋めてしまう。青年ガーニムによって墓から救い出された美女クト・アル・クルプがめでたく彼と結婚して幸せになる結末は、「白雪姫」にも似ているし、「ガラスの柩」にもよく似ている。

知人の墓参りに来て、コーランを唱えたり夕食をしているうちに帰るタイミングを失い、墓地で一夜を過ごしていたガーニムのところへ三人の宦官たちが大きな箱を運んでくる。とっさにガーニムは棗椰子のてっぺんによじ登って、葉の茂みに身を隠したのだ。朝まで待っていた彼が墓穴を掘り返す場面を見てみよう。

(ガーニムは)「あの箱の中味が知りたいなあ！」とひとりごとさえもりましたが、それでも、夜が明けるまで辛抱し、朝日がきらきらと輝くと、さっそく棗椰子からおりてきて、泥を手ですくってはねのけました。やがて、箱があらわになると、穴の中から引っ張り出して、大きな石を手にし、錠前がこわれるまでたたきつけました。それから、蓋をあけてみると、若い婦人が横たわっているではありませんか。美と愛らしさの鑑といってよい美人で、このうえなくりっぱな衣装や黄金の宝石のほか、国王の領土にくらべても、もっと値打ちのありそうな宝玉作りの首飾りを身につけておりました。この女は眠り薬を飲まされていましたが、胸が高く低く波打っているところを見ると、まだ息があったのでございます<sup>(17)</sup>。

「白雪姫」の小人たちが可愛らしい七つの明かりで、眠っている女の子を照らし出した時の描写は次のようだ。

「こいつは、たまげた！ こりゃあ、たまげたわい！ どうだい、この子どものきれいなことったら！」と、みんな、わあわあ言いましたが、うれしくて、うれしくてたまらないので、女の子はおこさずに、そのままねどこに寝かしておくことにしました。

美しいために嫉まれたり、いじめられたり、果ては殺されてしまう人がいるかと思えば、反対に「白雪姫」のように救われる人もいる。グリム童話「忠臣ヨハネス」の王子様など、絵に描かれた黄金の屋根の国に住む美しいお姫様を見た途端、気を失ってぼったりと床に倒れてしまったほどだ。「千夜一夜物語」のクト・アル・クルプも白雪姫も「ガラスの柩」のお姫様も、みな美しかったが故に男に救われて幸せになったのである。やはり、美はいつも恐ろしいほどの魔力を秘めている。

「千夜一夜物語」の美女はただ箱に入れられて墓地に埋められてしまったけれど、「白雪姫」や「ガラスの柩」になるとどちらも透明なガラスが登場する。

しかし、それ以前の類話であるコルシカ民話「アンジウリーナ」では、美女は椅子に座ったまま森の祭壇に置かれるだけで、まだガラスの柩も金の文字も出てはこない。そう、だからその意味では「白雪姫」も「ガラスの柩」も、まさしく18世紀という科学文化の時代を背景として書き上げられた物語とすることができるのである。

## 註

- (1) J.Bolte und G.Polivka: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm 2: Olms-Weidmann; Zürich. 1992.

- (2) フロイト「精神分析学入門」懸田躬克訳。中央公論社。昭和41年。
- (3) (2)と同書。
- (4) ジュリア&デリック・パーカー「夢」上野安子・他訳。マール社。1996年。
- (5) (4)と同書。
- (6) J.C.クーパー「世界シンボル辞典」岩崎宗治・他訳。三省堂。1992年。
- (7) ジャン・シュヴァリエ・他「世界シンボル大事典」金光仁三郎・他訳。大修館書店。1996年。
- (8) マイケル・グラント・他「ギリシャ・ローマ神話事典」西田実・他訳。大修館書店。1988年。
- (9) 山室静「ギリシャ神話」社会思想社。1963年。
- (10) (7)と同書。
- (11) (7)と同書。
- (12) アト・ド・フリース「イメージ・シンボル事典」山下主一郎・他訳。大修館書店。1984年。
- (13) (7)と同書。
- (14) (7)と同書。
- (15) 「日本大百科全書」小学館。1996年。
- (16) 金成陽一「誰が白雪姫を誘惑したか」大和書房。1991年。  
尚、ガラスの柩に関連して、ゲーテの「親和力」の影響についても同書参照。
- (17) バートン版「千夜一夜物語」大場正史訳。河出書房新社。昭和42年。